

2.4.2 流況経時変化
(1) 流速ベクトル

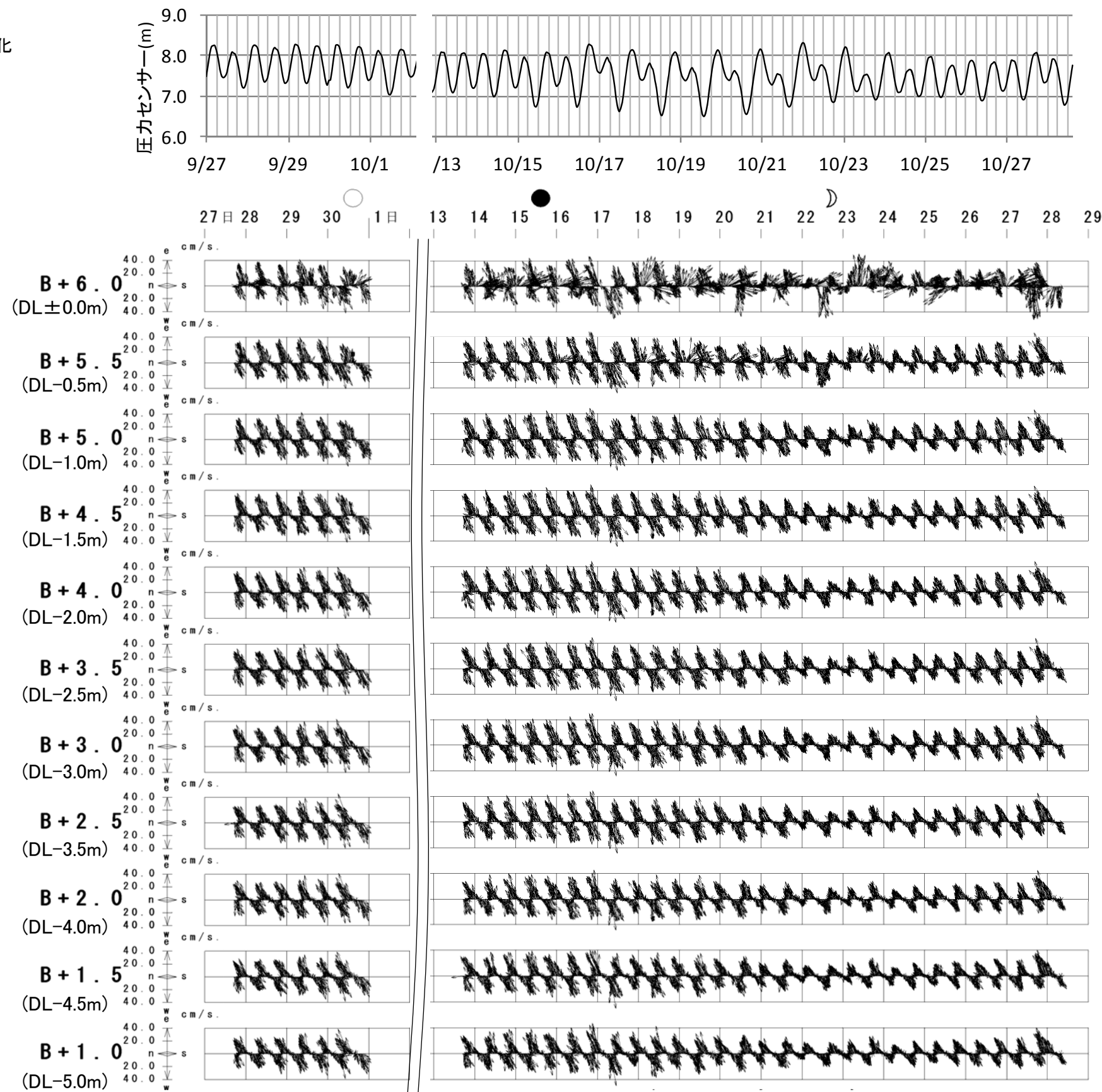
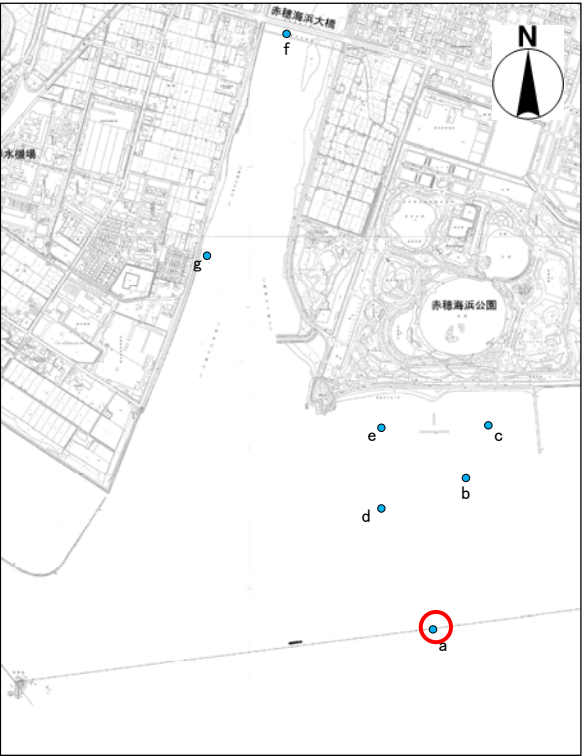


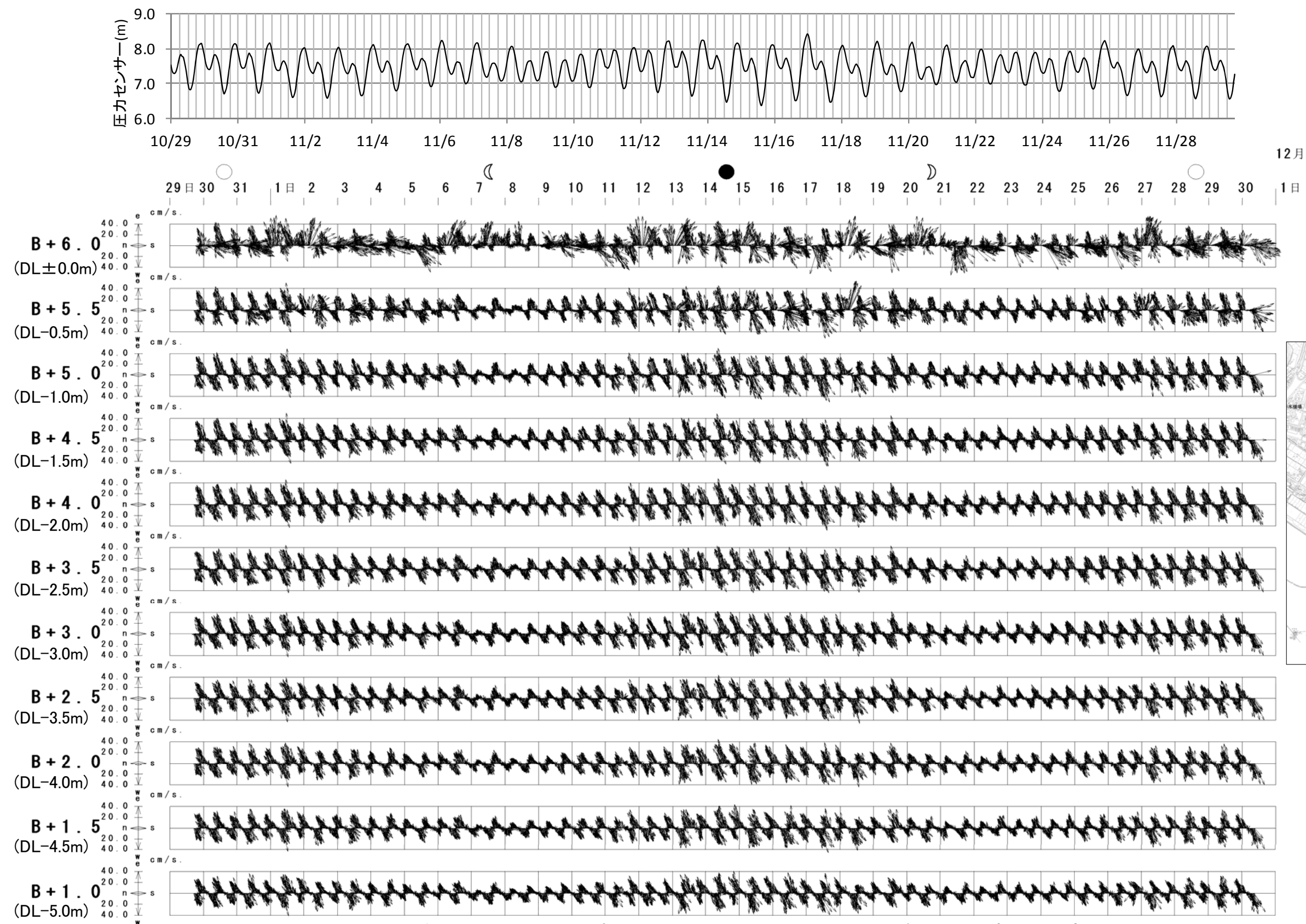
図- 2.16(1) 流況経時変化(ADCP、9月27日～10月28日)

- (まとめ)
- B+6.0m 層は水面の乱れの影響を受けている。
 - 上層から下層まで、流向流速はほぼ同様の傾向を示す。
 - 潮流は WSW と ENE 方向の往復流が卓越している。
 - 流速は最大で 50cm/s 程度である。



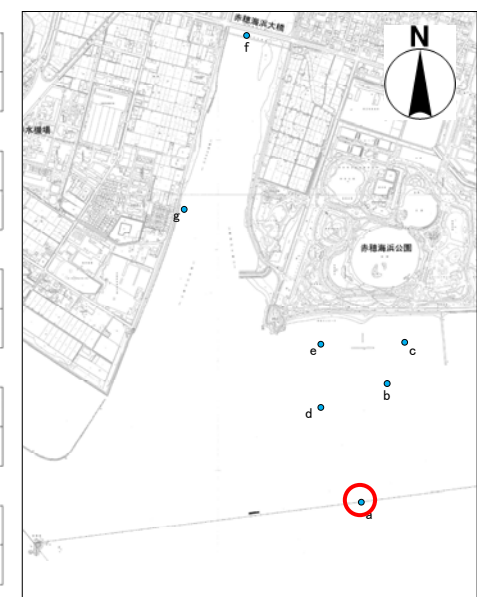
調査地点図

※10/1～10/13 は機器の不具合により欠測



(まとめ)

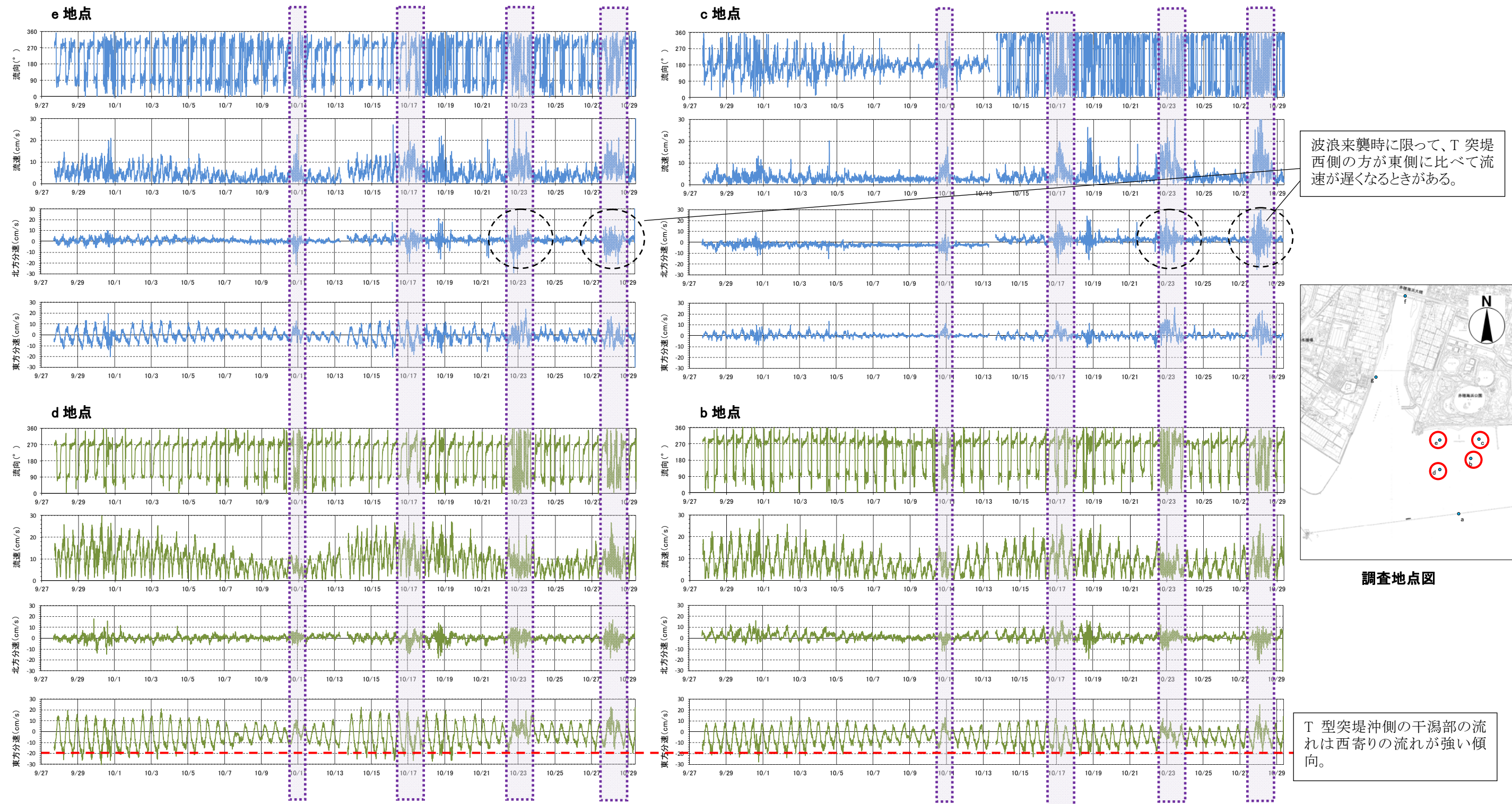
- ・10月同様 B+6.0m 層は水面の乱れの影響を受けている。
- ・上層から下層まで、流向流速はほぼ同様の傾向を示す。
- ・潮流は WSW と ENE 方向の往復流が卓越している。
- ・流速は最大で 50cm/s 程度である。



調査地点図

図- 2.16(2) 流況経時変化(10月30日～11月30日)

(波浪来襲時)
岸側 c、e 地点: 波浪により通常時よりも流速増加
沖側 b、d 地点: 通常の大潮期の潮汐による流速が大きく、今回の観測された程度の波浪では、流速の増大因子としての影響は小さい。



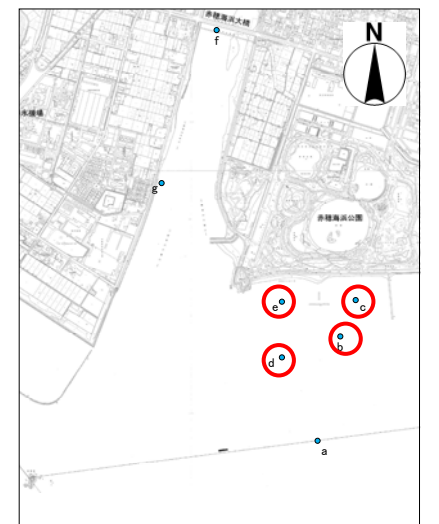
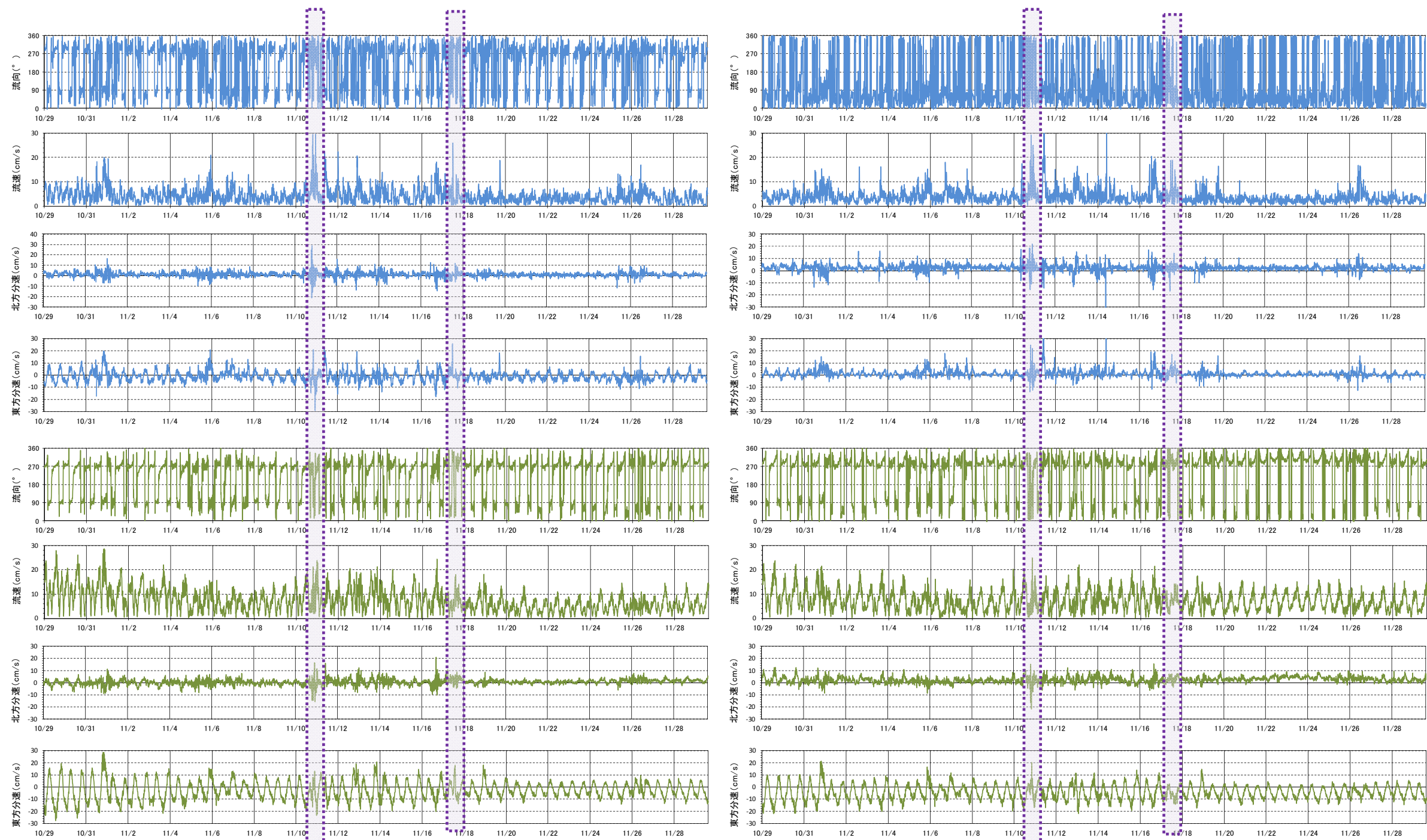
波浪来襲時に限って、T 突堤
西側の方が東側に比べて流
速が遅くなるときがある。

T 型突堤沖側の干潟部の流
れは西寄りの流れが強い傾
向。

(まとめ)
・c 地点(T 突堤東側)の方が e 地点(T 突堤西側)に比べて潮汐の影響は小さい。岸側 2 地点(c 地点、e 地点)は波浪来襲時には通常の潮汐流よりも流速が増大する。
・沖側の b 地点、d 地点は、東方分速を見ると西成分がやや大きく、平均的には西に向かう流れが生じている。

図- 2.16(3) 流況経時変化(9月27日～10月28日)

(有義波高 1m 程度の波浪来襲時)
10 月と比べて北方成分の流速値が小さく、風向が西寄りであったことが流速の変化に影響していると考えられる。



調査地点図

(まとめ)

- ・波浪の来襲とともに流速は増大するが、北方分速は 10 月に比べて小さい。→波浪来襲時に岸沖方向の流速が 10 月に比べて小さい。
- ・風向が 11 月は西寄りにシフトすることで、波浪来襲時の北方分速(流れの岸沖成分)が 10 月ほど上昇しない。→干潟部の波高が低下し、濁りの発生も低下していると考えられる。

図- 2.16(4) 流況経時変化(11月1日～11月29日)